い～な
診療所
ねぎぼうず
あまみ　中　中　央　つなぐの　さくら
事務局
研究所
しらさぎ

大阪＋知的障害＋地域＋おもろい＝創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会　社会政策研究所情報誌通算 3358 号 2016.11.22 発行

==

言葉「いただきます」　漢字クッキーが好評　　　　大阪日日新聞　2016 年 11 月 21 日

「言葉をかみしめる」とはよく言うが、本当に食べるとはー。大阪市中央区谷町６丁目にある「ことばをたべるカフェみずうみ（みずうみ）」では、漢字をかたどったクッキー「かんじクッキー」（１個３００円）が好評だ。こんがり焼かれた『結』や『手』。さて、その味は？

タロットカードをテーマにしたイベントで登場したかんじクッキー。上段左から「魔」「星」「戦」。下段左から「塔」「恋」

複合施設「萌」の２階にある「ことばをたべるカフェみずうみ」。冷蔵庫が本棚になっている

「みずうみ」は、私設図書館のまちライブラリーとして今年５月にオープン。わずか５・５平方メートルの一室には、机１台と椅子２脚が置かれ、本棚代わりの冷蔵庫には食がイメージされる本が中心に所蔵されている。壁は青く塗られ、「湖の底で言葉を発掘するイメージ」と、オーナーの寿谷祐実さん（３４）ははほ笑む。

「もともとがスローペースの性格」という寿谷さん。インターネット技術が普及し、スマートフォンは幅広い世代に浸透。ツイッターや無料通話アプリ「ＬＩＮＥ」など情報伝達手段は多岐に渡り、“言葉”があらゆる場所ではん濫している今だからこそ、「言葉が記号のように流れている。言葉一つ一つの響きや魅力と対話したい」と、かんじクッキーの制作に至った。

クッキーの原材料は必要最小限で添加物は一切使わない。一画ずつ重ねた文字は武骨な見た目で、味も極めてシンプル。試しに『手』を頂いたが、歯ごたえ十分でまさに「言葉を?（か）みしめる」だ。クッキーを食べているのだが、『手』を食べている…。ぐるぐると思考が巡る。

かんじクッキーは日替わりで販売され、字のリクエストにも対応可能。「みずうみ」では、週末ごとに言葉や本に関するイベントが開催され、それに関連したかんじクッキーが販売されている。

「言葉の魅力を再発見することで、一人一人がおもしろい魅力を持っていること、自分自身の価値に気付くことができれば」と寿谷さん。素朴な味だが、なかなか奥深い。

大阪市中央区谷町６丁目５の２６複合施設「萌」２階。営業時間は午前１１時～午後７時。水曜日定休。

大阪市長居障がい者スポーツセンター　誰もが楽しめる　今年９月で利用者１０００万人

東住吉区　／大阪　　毎日新聞 2016 年 11 月 20 日

風船バレーの練習試合を前に、円陣を組み気合いを入れる＝大阪市東住吉区で、梅田麻衣子撮影

各国の選手の活躍が世界中に感動を与えたリオデジャネイロ・パラリンピック。「大阪市長居障がい者スポーツセンター」（東住吉区）は全国初の障害者スポーツ施設として１９７４年に開館した。多くのパラリンピアンを生み、今年９月には利用者数が１０００万人を突破した。訪れると、障害に関係なく、みんながスポーツを楽しんでいた。

身体障害者ら限定の郵便投票制度、対象者拡大へ　　　　　読売新聞　2016 年 11 月 20 日

総務省は身体障害者らに利用が限定されている不在者投票の郵便投票制度の対象者拡大に向け、有識者による研究会を近く設置し、具体的な検討に着手する方針を固めた。

郵便投票は、投票所まで行けない人が自宅などで投票用紙に記入して、郵送で投票する制度。身体障害者手帳を持つ人や介護保険で「要介護度５」に認定された人などに認められている。２０１４年の衆院選小選挙区では約２万３０００人が利用した。

ただ、要介護度にかかわらず、歩行が困難な人は自力で投票所に行くのが難しく、投票を見送るケースもある。高齢化が進む中、将来的に郵便投票のニーズが高まることが予想されることから、「要介護度５」以外の高齢者らについても郵便投票を認める方向で、課題を整理したい考えだ。

筋痛性脳脊髄炎の患者を救済へ　治療法の開発促す議連発足

福祉新聞　2016 年 11 月 21 日　編集部

あいさつする丹羽会長（左端）

疲労感や痛みが続く筋痛性脳脊髄炎患者の救済を進める議員連盟が 15 日、発足した。病態の解明や治療法の研究を進め、患者が福祉サービスを受けられることを目指す。会長に就いた丹羽雄哉・元厚生大臣は「患者に少しでも希望を持ってもらえれば」とした。

患者で構成する「筋痛性脳脊髄炎の会」（篠原三恵子理事長）によると、国内の患者数は推計 24 万～30 万人。現在、診断基準や治療法がなく、難病に指定されていない。「病気というよりは症状に近い」（厚生労働省難病対策課）と認識されている。

２０１４年度の厚労省による実態調査では、患者の約３割が寝たきり状態であることが判明。しかし、患者は障害者総合支援法による居宅サービスや車いすなどを利用できない。家族が 24 時間ケアする例もある。

同日は、神経内科の専門医としてこの病気の患者を 40 人以上診察してきた山村隆・国立精神・神経医療研究センター部長が「これまでは疲労の基礎研究が中心だったが、治療薬の開発研究にかじを切るべきだ」と訴えた。

篠原理事長も「この病気は約 50 年前からＷＨＯ（世界保健機関）で神経系の疾患と分類されているが、日本では 20 年以上にわたり『慢性疲労症候群』と捉えられている。日本は非常に遅れている」と話し、議連の活動に期待を寄せた。

＜始まる医療再編＞住民交え「痛み」議論を

河北新報　2016 年 11 月 21 日

人口減少と高齢化が急速に進む社会で地域医療をいかに守るか。山形県庄内北部で始まった医療再編の動きを取材し、切迫感を抱いた。働き手不足や国民医療費の膨張を背景に全国でも医療提供体制の見直し議論が進む。山積する課題は病院や行政だけでは解決できない。住民一人一人が医療を次世代につなぐために何ができるか、主体的に考える機会と捉えてほしい。

「今後１５～２０年で日本は経験のない高齢社会を迎える。病院単体ではなく地域全体で今より格段に『燃費の良い』医療提供体制を構築しなければ、地域に医療を残せない」

酒田市の基幹病院を運営する地方独立行政法人「山形県・酒田市病院機構」の栗谷義樹理事長は語る。

機構は９月中旬、市内の複数の医療・社会福祉法人と職員の相互派遣や医薬品の共同購入ができるグループづくりに着手した。重複する機能の解消を視野に入れ、できるだけ無駄のない地域完結型の医療と介護体制を目指す。

酒田市も市立八幡病院の入院ベッド（病床）を無くし、機構に移管・統合する方針を示した。地域住民に不満の声はあるが、医師や看護師が不足し、市から年間２億５０００万円もの繰入金が出ていることを考えれば、やむを得ないのかもしれない。

そもそも医療制度自体が行き詰まりつつあるからだ。

国民医療費は昨年度、概算で４１兆５０００億円に達した。厚労省推計によると、高齢化と医療技術の進歩で２５年度には６１兆円に及ぶ。現役世代２．３人で高齢者１人を支える人口構成は６０年に１．３人で１人になる。労働力人口は全体で減るが、医療・福祉分野は３０年までに新たに２００万人前後が必要とされる。

国の医療政策に詳しい政策研究大学院の島崎謙治教授（社会保障政策）は「問題を先送りにすれば財政・人的制約は厳しくなり、政策的な選択肢が狭まる。残された時間はほとんどない」と話す。

国は、都道府県ごとに策定する地域医療構想をベースに、病床の再編と在宅医療の拡充に乗り出した。医療人材の効果的な配置と公費支出の抑制を狙う。

９月に策定した山形県は全県で１万余りの病床について、既に過剰とされる急性期を中心に１０年間で２割減らす目標を盛り込んだ。青森県は弘前市内二つの総合病院の統合など津軽地域の公的病院の再編を提案した。

医師不足と過疎化が進む地方で医療を守るのは容易でない。「痛み」が避けられない状況になるかもしれない。だからこそ、行政や医療機関は余力のあるうちに住民を交え、地域医療の在り方や展望を共有する場を多く持つべきではないか。

０９～１１年に岩手県が取り組んだ県立病院・地域診療センターの無床化を取材した。地域の将来を考えた住民有志が医療・介護の受け皿を残そうと動き、医療施設内に特別養護老人ホームを設けるケースがあった。

病気や介護の予防など個人で取り組めることもある。「感情論」ではなく、本当に支援が要る人が医療と介護を受けられる社会に向け、行政、医療、介護関係者と住民にそれぞれ何ができるのか。同じテーブルで突き詰めていくことが必要だ。（酒田支局・亀山貴裕）

［地域医療構想］団塊世代が７５歳を過ぎる２０２５年を見据え、都道府県が将来の医療需要や適正な病床数を推計し、目指す医療提供体制などを定めるビジョン。病床を緊急性の高い順に高度急性期、急性期、回復期、慢性期に分類し、医療機関の自主的な減床や見直しを促す。国全体では１割超の削減が目標。実現のため２次医療圏ごとに医療・福祉団

体や市町村でつくる調整会議を設ける。

山下画伯ら入所施設の歩み紹介＝千葉市　　時事通信　2016 年 11 月 21 日

放浪の天才画家山下清が入所していた福祉型障害児入所施設「八幡学園」（千葉県市川市）の歩みを紹介する特別展が淑徳大学千葉キャンパス（千葉市）の大学アーカイブズ特別展示室で開かれている。山下清の貼り絵作品も期間限定で公開しており、入場無料で誰でも見学可能。来年４月２８日まで。

八幡学園は１９２８年に創設。多くの入所者が、特性に見合った絵画や工芸などの作業を通じ、才能を開花させてきた。山下は３４年に入園、放浪生活を始めた後も学園に時々帰り、作品を仕上げたという。特別展は、学園や入所者の資料や作品、パネルを約１３０点そろえた。このうち、山下清の作品２点は来年１月２７日まで展示している。

誰もが住みよいまちとは　陸前高田でフォーラム　　岩手日報　2016 年 11 月 21 日

熊谷晋一郎准教授の言葉を紹介しながら障害者も住みよいまちづくりへ意見を交わしたフォーラム

ＡＩＤＳ文化フォーラムｉｎ陸前高田（運営委主催）は２０日、陸前高田市高田町のコミュニティホールで開かれた。障害者も住みよいまちづくり、若者のコミュニケーションなどについて意見交換した。

市民ら約７０人が参加。戸羽太市長や同市の地域包括ケアアドバイザーの岩室紳也医師（横浜市）、産婦人科医の上村茂仁さん（岡山市）らが障害者の自立支援、若者のデートＤＶや学校でのコミュニケーションのとり方をテーマに意見を出し合った。

障害者の自立支援について、体調不良で同日参加できなかった脳性まひ障害がある東京大の熊谷晋一郎准教授の「自立は依存先を増やすこと。希望は絶望を分かち合うこと」という言葉を紹介。戸羽市長は「障害者を勘違いしている健常者が多い。個性を認め合い、自立へのチャレンジができる環境づくりが大切だ」と語った。

拒否されて？支援届かず　３遺体発見、悩む自治体　　朝日新聞　2016 年 11 月 21

男女３人の遺体が見つかった住宅＝岐阜市茜部本郷２丁目

岐阜市茜部（あかなべ）本郷２丁目の竹内勝利さん（７３）宅で１７日、一家３人とみられる遺体が見つかった。一家は主な収入もなく、身の回りの片づけができない生活状況に陥りながら、行政の介入を拒んでいた可能性が出ている。こうした人たちにどう支援の手を届けるのか、自治体は対策を模索する。「ただちに支援が必要だという兆候も、本人からのＳＯＳもなかった。ただ、もっと早く警察に通報していれば……」。市の担当者は振り返る。捜査関係者によると、夫婦とみられる２遺体は死後２カ月ほど、長男の利和さん（４３）とみられるやせ細った遺体は死後１週間程度が過ぎていた。家の中は新聞などが積まれ、浴槽にもごみがたまっていた。近隣住民らの話では、勝利さんと、障害があったという利和さんはともに無職。妻の由美子さん（７１）が生計を支えていたが、今年３月に仕事を辞めたという。

社説：堺・男児不明　子を守る体制の点検を　　朝日新聞　2016 年 11 月 21 日

最悪の事態に至る前に、なぜ手を打てなかったのか。悲劇を繰り返さないために、関係当局は徹底した検証が必要だ。
大阪府南部の山中で、３年前から行方不明の男児（４）とみられる遺体がみつかった。父親は「死んだのは私の暴力が原因」と供述した。府警は父親を傷害致死、母親も保護責任者遺棄致死容疑で逮捕した。
男児は１２年４月、両親が詐欺容疑で逮捕された際に児童相談所に保護され、翌年末に親元へ戻っていた。以来、所在が分からなくなっていた。
男児の消息を知る手がかりはあったのに、守れなかった自治体の責任は大きい。
一家が暮らしていた大阪府松原市は、昨年２月、男児の妹（２）がやけどを負ったことを、医師の通告で知った。市は「育児放棄の疑いがある」として複数回、家庭訪問していた。ところが男児については直接会って確認はしなかった。
昨年夏には、３歳児健診の案内を市地域保健課が通知した。両親は「日程を変更したい」と６回にわたって延期してきた。結局、受診することなく、１２月末に堺市へ転居した。
健診の未受診は虐待の兆候でもある。大阪府の指針では、保健師らが子どもに会って確認するよう求めている。市は「親から延期の連絡があったので疑わなかった」というが、認識が甘かったと言わざるを得ない。
自治体と児童相談所の連携も不十分だった。
両親は１３年夏、おいにあたる男児の死体遺棄容疑で、書類送検されていた。公訴時効で不起訴になったが、「遺体は河川敷に埋めた」との供述もあった。おいの行方はいまも不明だ。
この事件のことを児相は松原市に伝えていなかった。子どもの命にかかわる情報で、注意を促すべきではなかったか。
大阪府は児相や市の対応について、近く検証を始めるという。連携不足の背景や警察との情報共有のあり方など、課題をあぶり出す必要がある。
保護すべきだったが、踏み切れなかった。児童虐待ではしばしばそんな話を聞く。様々な事情が絡み、結果論で安易に語れぬ面はある。だが子どもの命を守るのは大人の責任だ。個々の事件を大切な教訓とし、今後に生かさねばならない。
厚生労働省によると、住民票はあるのに乳幼児健診を受けていないなど、居住実態が不明な１８歳未満の子が、７月現在で少なくとも２５人いるという。
体制に不備がないか、各自治体はいま一度点検してほしい。

【主張】がん基本法の改正　安心して病と闘うために　　産経新聞　2016 年 11 月 21 日
がん患者が治療しながら働き続けられる環境整備を盛り込んだ「がん対策基本法」の改正案が、参院で可決され、衆院の審議を残している。早期成立を求めたい。
治療技術が進歩し、がんはかつてのような不治の病ではなくなった。早期発見、治療により、いわば「付き合っていく病」となっている。
改正案の特徴は、新たに企業側の「事業主の責務」を設けたことである。働く人ががんになっても、就労を継続できるよう配慮する努力が求められている。
働きながら通院治療するがん患者は３３万人に上る。しかし、治療と就労を両立させる環境は整っていない。
がんになった場合、解雇や依願退職によって３人に１人が職を失う。体力低下のほか、仕事の都合で通院の時間がとれないことなどが理由だ。職場ではよく理解されていない現状を表すものだ。
がんであることを職場で隠しているケースもまだ少なくない。それでは十分な治療が受けられないし、上司や同僚らのバックアップも得られない。
法改正は、そうした職場の意識を変え、啓発にもつながることを期待している。早期発見のほか、予防の取り組みも欠かせない。検診の徹底などは、社員と企業双方の利益にか

なうものだ。
　改正案には症例が少ない希少がんや難治がんの研究促進のほか、がん検診の着実な実施も盛り込まれた。検診率は注目されるが、検診“後”に注意を払い、再検査や受診につなげることが大切だ。地道な努力が必要なのに、長年、後回しにされてきた。
　がん対策基本法は１０年前に成立した。自身も患者だった民主党・新緑風会の故山本孝史氏が、参院本会議で成立を訴えた。バラバラだった患者団体が一致して成立に向けて動いた。成立までの過程は多くの患者を力づけた。
　かつては地域によって、がん治療の質や量に差があった。がんと診断されても、放射線や抗がん剤治療の受けやすい地域や受けにくい地域があり、「がん難民」が社会問題化したこともある。
　この１０年にがん対策は進み、拠点病院が整備されてきた。検診や研究に大きな予算もつくようになったが、まだ足りない。与野党の対立がない法案である。患者本位で成立を急いでほしい。

夢は虐待から子どもを救う教師～経験を力に変えた女子高生

カンテレワンダー　2016 年 11 月 16 日

大阪府の松原高校では、自分の抱える問題を深く掘り下げる「課題研究」という授業を行っています。自分の生い立ちを見つめ直し、「虐待問題」を学ぶ女子高生と、共に考える先生の取り組みを見つめました。大阪府立松原高校。国籍の異なる生徒や障がいがある生徒。様々な背景のある生徒たちが一緒に学んでいます。
学校では全ての生徒が、「課題研究」という授業に取り組んでいます。
【高校生】「兄に障がいがあります。兄はその障がいによっていじめを受けてきました。私はその人の痛みをちゃんとわかって大切にして」
テーマは時に、自分の抱える問題に踏み込んでいくこともあります。

自分を見つめ直し、仲間たちと語り、何かを変えていくことで、前に進んでほしいと願っています。
【葛西加桜さん】「私のテーマは子どもの虐待問題です。私の小さいころの記憶は暴力、私のお母さんがお父さんに殴られてるっていう、ちっちゃかったから私はやめて！と泣き叫ぶことしかできなくて、止められなくて、という記憶があって」
松原高校 3 年生の葛西加桜さん。
研究テーマは「子どもの虐待問題」です。
4 人姉妹の長女。
暴力などの問題で、父親が２回変わりました。
それでも自分の家がすべてだった加桜さんは、自分が虐待を受けているとは思いませんでした。
【葛西加桜さん】「あ、けがしてたんや。みたいな。自分が小さい頃は暴力からお母さんを守れなかった。逆にママの傷とか覚えてる。自分のはあんまり、どうってことないです」
小学２年生からテコンドーを始めました。

強くなりたい一心で練習。全日本ジュニア選手権で 6 連覇を達成しました。
テコンドーが身を守ることも…
【葛西加桜さん】「（二番目の父と母が）大乱闘になって、けんかしだして、その時に間に入って。（父を）蹴っちゃった。人は飛びます（笑）結構」
加桜さんの「課題研究」の授業を担当している松

原高校の中川泰輔先生。
【中川泰輔先生】「自分の答え見つけれなくていいから。すぐに『さあ、障がいのある人たちとよりよい社会にしていきましょう』みたいになるわけないやん。『まとまらんかった。終わり』でもいいからさ、迷いとかをここに表わしてほしいねん。俺は。」
人前で自分をさらけ出したことのなかった加桜さんが初めて自分の生い立ちを語った大人が中川先生でした。
【中川泰輔先生】「こんな中でこいつやってたんかっていうのはすごいだからびっくりはしましたけど。僕も初めて大人にも言ってなかったようなことを、課題研究のテーマを決める時に話をしたんですよ。自分もこういうことがあって、その気持ちがわかるよと。それを聞いて葛西も泣いてたし、僕も泣いてたしっていう」

中川先生と話していくうちに、加桜さんは自分の問題を研究することで、虐待から誰かを救えるのかもしれないと思うようになりました。
そして、夢ができます。教師になって、子どもたちを虐待から救いたい。
「虐待問題」の映画や文献を調べ、先生たちと話の舞台となった場所を歩き、当事者の話を聞いていきました。

自分の足で辿り着いた答えがあります。
【葛西加桜さん】「『それ虐待やで』っていうだけの大人にはなりたくない。『虐待されてるで』って子どもに言って喜ばんでしょ。自分は親好きやし、隠さなあかんと多分また思ってしまう。もっとＳＯＳを出せなくなる。ぽんと投げ出すようなことは絶対したらいかんなって」
先生の紹介で出会った純さん。
家庭の都合で小学 5 年生まで、学校に行くことができず、高校 3 年生の時に母親が失踪したと言います。

純さんを前に、加桜さんは何も聞くことができませんでした。
中川先生の提案で、自分の生い立ちを綴った作文を読んでもらいました。
【純さん】「大変やん。加桜ちゃん、大変やんか」
【葛西加桜さん】「そんな大変でもないです」
【純さん】「自分のことは大変って思わないやんな。なんで自分のことやとなんで大変じゃないと思っちゃうんやろうって思わへん？小さい加桜ちゃんはめちゃめちゃ頑張ってきたんやから、加桜ちゃんも加桜ちゃんを認めてあげたらいいし、十分やってるよ。グレてあちこちで寝転がっていてもおかしない。」
「課題研究」の中間発表の日です。
【葛西加桜さん】「虐待は身近にある。すぐ隣の友達が虐待にあってるかもしれん。すぐ隣に住んでいる子どもが虐待にあってるかもしれん。その子どもをみんなはもう一回傷つけてしまうかもしれない」
そして、純さんの言葉を伝えました。
【葛西加桜さん】「『加桜ちゃん、ようがんばったな。もうがんばらなくていいねんで。自分守りなさい』と言われて、すごく安心した。加桜の将来の夢は高校教師。純さんみたいな子どもいっぱいいると思う。先生になったら、学校でこの子を支えたい」
教師になることを目指し、先月、関西大学を受験しました。

【葛西加桜さん】「合格してる！」
「すごいいい人にばっかり会うから、いい人のおかげでいい人になれる気がします。」
【中川泰助先生】「あの子（加桜さん）にしか救われない生徒がこれから出てくる。あの子がいるから救われる生徒が、先生になったらいっぱい出てくるんじゃないか。そんな時は一緒に同僚として働けたら面白い。」

生徒達へ、先生からのメッセージ。
「壊せ」そして「進め」
卒業前の研究発表まであと２カ月。
18 年間の人生を力に変えて、未来に進むための挑戦。
自分だけが見つけられる、答えがあります。

障害者が輝く舞台に　ファッションショーやダンス　久留米で来年２月「共生の理念表現したい」［福岡県］　　　西日本新聞　2016 年 11 月 22 日

２０１４年に開いた障害者をモデルとしたファッションショーチラシを持ち笑顔を見せる実行委員長の松尾博子さん（中央）と実行委のメンバー

障害者と健常者が同じステージでファッションショーやダンス、バンド演奏などを披露するイベントが、久留米シティプラザ（久留米市六ツ門町）の中ホール「久留米座」で企画されている。主催者は「全ての市民が共に生きるノーマライゼーションの理念をステージで表現したい」と意気込んでいる。

イベントは「ＰＲＩＳＭｉｘ～ノーマライゼーＳＨＯＷ～」と題し、来年２月２６日の予定。同市の障害がある子どもを持つ親の会「ｇｏｃｏｃｈｉ（ゴコチ）」が主催し、同会代表の松尾博子さん（４６）が実行委員長を務める。

ゴコチは、２０１４年にも市内のホテルで、１０～６０代の障害のある女性によるファッションショーを主催した。「障害があるからオシャレはできない。そう思っていた人が、メークをしてきれいな着物をまとい、美しくなった自分を見て生まれてきて良かった、と話したんです」。松尾さんは自信が芽生えた障害者の姿に感動を覚えたという。

２月のイベントには市内を中心に約３０人の障害者が出演。福岡市の香蘭ファッションデザイン専門学校の学生が制作した、障害がある人でも着用しやすい久留米絣（がすり）のドレスをショーで披露するほか、人気グループ「ＥＸＩＬＥ」のダンスを踊るという。

出演者の衣装材料費などがかさみ運営資金は不足しており、実行委は支援を呼び掛けている。寄付額ごとに障害者たちが手作りしたポストカードや、さをり織りのネックストラップなどをお返しとして贈る。募集期間は今月２７日まで。松尾さんは「障害の有無にかかわらず、一人一人の個性が光るショーを作るため、力を貸してほしい」と話している。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町 5-33　社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会　社会政策研究所発行